

P-37 卵巣摘出後の体脂肪・体格の骨密度に及ぼす影響

長崎大

山口敦巳, 石丸忠之, 松脇隆博, 山辺 徹

〔目的〕閉経後や卵巣摘出後(卵摘)の皮下脂肪はエストロゲンの主な産生源である。また、体重は骨量維持に働く。そこで、卵摘後の体脂肪や体格と骨密度との関係について検討した。〔方法〕当院にて閉経前に卵摘を受けた婦人61例を対象とし、DEXA法により腰椎骨密度、大腿骨頸部骨密度、全身の骨塩量、体脂肪、非脂肪組織量を測定し、同時に、QCT法で腰椎海綿骨々密度、皮質骨々密度を測定した。〔成績〕体脂肪による検討では、体脂肪率30%以上と未満の両群間で、DEXA法・QCT法とも、各種骨密度に有意差は認められなかった。DEXA法による腰椎骨密度0.86以上と未満の群間でも、体脂肪率に有意の差は認められなかった。全身骨塩量/全身非脂肪組織量比が、6以上と未満の群間では、それぞれ腰椎骨密度(DEXA法; 0.831 ± 0.112 vs 0.730 ± 0.109)、大腿骨頸部骨密度(DEXA法; 0.812 ± 0.111 vs 0.699 ± 0.144)、腰椎海綿骨々密度(QCT法; 122.9 ± 31.8 vs 90.6 ± 24.3)、腰椎皮質骨々密度(QCT法; 261.9 ± 41.3 vs 240.2 ± 33.1)のいずれの測定法でも、骨密度に有意の差が認められた($P < 0.01$)。全身骨塩量/全身非脂肪組織量比が高く、骨密度の比較的保たれた群は、有意に年齢が若く(48.6 ± 9.9 vs 57.7 ± 9.0 , $P < 0.01$)、術後月数が短い傾向(69.3 ± 49.0 vs 88.2 ± 40.9)がうかがわれた。〔結論〕卵摘後婦人において、全身骨塩量/全身非脂肪組織量比が6以上(結合組織中に骨塩の占める比率の高い群)の婦人は、海綿骨・皮質骨ともに骨密度が保たれていた。一方、体脂肪に関しては、卵摘婦人において体脂肪の骨密度に与える影響は比較的少ないものとみなされた。

P-38 閉経期女性における腰椎X線像, 中手骨MD法による骨量減少判定と腫ホルモン細胞診についての検討

国立東京第二病院

斉藤英子, 和泉 滋, 脇田哲矢, 渡辺豊治, 吉田洋子, 板倉紘一, 矢野方夫, 山岡完司

〔目的〕閉経期女性のエストロゲン活性低下や骨量減少が日常臨床でも問題視されてきているが、適切な治療には個々の患者の病態の総合的把握が重要である。本研究では腫ホルモン細胞診と単純X線撮影による骨量測定を施行し、それらの検査法としての有用性を検討した。〔方法〕1990年から1992年の間に骨粗鬆症外来にて(1)130例に対して腰椎X線像の慈大式分類(以下慈大式)及び中手骨MD法による骨量減少判定とを施行した。(2)(1)と同時に腫ホルモン細胞診を施行し得た79例においてMaturation Indexに基づいて、表層細胞遺存群(表群), 14例, 平均50.4歳; 中層細胞主体群(中群), 49例, 49.7歳; 傍基底細胞主体群(傍群) 16例, 55.4歳の3群に分けた。〔成績〕(1)慈大式腰椎骨量減少判定はMD法の中手骨骨密度 Σ GS/Dや骨皮質幅MCIに相関(それぞれ $y = -0.0051x + 0.434$, $y = -0.212x + 2.642$, $p < 0.001$)し、MD法よりも早期から骨量減少が発見された。(2)慈大式による腰椎骨量減少例は表群35%, 中群37%, 傍群56%であった。MD法において Σ GS/Dが-2SD以下の低値例が表群0%, 中群27%, 傍群50%, MCIでは表群0%, 中群8%, 傍群5%であった。〔結論〕(1)慈大式腰椎骨量減少判定は骨粗鬆症の早期発見に有効と考えられた。(2)腫ホルモン細胞診にてエストロゲン活性の低下が示唆されるものほど腰椎, 中手骨とも骨量低下例が多く、閉経期骨粗鬆症のエストロゲン活性依存性を裏付ける結果であった。しかし、表群の骨量減少例のようにエストロゲンの低下のみが原因とは考えにくい例があった。骨粗鬆症の治療に際し、両法の併用は有効であると考えられた。